文化 Culture

な。

帰国して間もない9月11日、ニューヨークであの惨劇が起こった。世の中がひっくり返ったような無力感の中で、「野生のアイリス」を読むことが、少々大げさだが、私の救いになった。

グリュックの詩の中に表れる米国北東部ニューイングランドの自然や風物は、私の暮らす北海道、ことに札幌近辺と似ており、親近感を覚える。それらに寄せる彼女の優しい気持ちは、日本人が自然に寄せる気持

ノーベル文学賞 ルイーズ・グリュ

「野生のアイリス」と出

2020年のノーベル文学賞に決まったルイーズ・グリュックさん(EPA=時事)

んだ当時の私は、感激この上もなく手紙を書いた。ところが、郵便局で手紙は差し止められてしまった。あの大惨劇の直後の米国は、世界のどこからの郵便物も受け取らなかった。もっと早くに書いておけば、と思っても後の祭り。以来、幾編かの詩を翻訳し、論文も書いたが、詩人への手紙はまだ出せずにいる。

(きむら・じゅんこ=北海道武蔵女子短期大名誉教授)

◆川柳・うまっこ348 作品から、馬場ひろ志さんの〈負けられぬコロナへマスク離せない〉、金田昭子さんの〈少しずつ受容していく多様性〉、潤子さんの〈ウィルスと並んで見てる空の底〉、田鎖晴天さんの〈異常気象続き異常が通常に〉、山田十九子さんの〈ライトアップ心のうつを消す光〉、濃尻善英さんの〈青空も讃えてくれた逆転打〉など。

(はちのへ川柳社=八戸市尻内町鴨ケ池108の6)

▽締め切り=10月28日(必着)

▽賞=1、2、3席と新人賞、特別賞各1編。佳作数編。賞金は1席30万円、2席7万円、3席5万円、新人賞、特別賞は3万円。佳作に記念品

▽選考方法=選者3人による一括選考

▽発表=入賞者名と作品名は本紙元日付で発表。1、2、3席と新人賞、特別賞は元日付から

で入賞歴のある人は、賞の種別と受賞年も記入

▽応募方法=本社ウェブサイト(https://form.daily-tohoku.org/culture)の応募フォームから、または郵送で。郵送の場合は〒031-8601、八戸郵便局私書箱40号、デーリー東北新聞社文化部「新春短編小説」係

デーリー東北新聞社

東北史の最新研究反映

吉川弘文館が一般書2冊刊行

旧石器時代から東日本大震災後まで、東北地方の歴史を通史的にまとめた東北学院大文学部歴史学科編『大学で学ぶ東北の歴史』が、吉川弘文館から刊行された。近年は同社の『東北の古代史』『東北の中世史』シリーズなど、東北の歴史に焦点を当てた論文や一般書も多く出されており、こうした一連の研究成果を基にした通史が、コンパクトに学べる一冊になっている。

同書は、大学などで東北の歴史を学ぶテキストを念頭に置き、最新の研究を踏まえながらも読みやすく編集されている。日本史全体を俯瞰しつつも、その中で東北がどのような位置付けがされているかが丁寧に論じられている。

東北の弥生時代については、中期には沖積平野や盆地で広く水田農耕が行われて集落が営まれた一方、西日本とは異なり、有力な支配者が登場せず、戦争が起きた痕跡が見られないなどの特殊性を指摘。近代史では、引き揚げ時の「悲劇」が注目されがちな満州移民政策に、東北出身の軍人らが期待し、積極的に進めようとした事実とその背景にも迫っている。

福島県に原子力発電所が誘致された経緯や、被災地における民俗行事の「復活」など、東日本大震災関連の歴史にも多くのページを割いている。各章末には参考文献を挙げており、詳しく学びたいときの道しるべになる。

特に戦国時代に関心があるという人には、同じく吉川弘文館から出たばかりで、『大学で学ぶ～』の執筆陣の一人でもある同大の竹井英文准教授の『列島の戦国史7 東日本の統合と織豊政権』がお薦め。

南部氏や伊達氏をはじめとする東日本の戦国大名の抗争を描くだけにとどまらず、この時代の城館や宗教、芸術、旅、自然災害など多分野にわたって解説している。関東、東海地方も含めたより広いエリアを対象とするが、通史類に取り上げられることが少なかった東北の事例を意識的に多く取り入れたのが特徴だ。

『大学で学ぶ～』は2090円、『列島の戦国史7』は2750円。(松浦大輔)

『大学で学ぶ東北の歴史』

『列島の戦国史7 東日本の統合と織豊政権』

文化財劣化 AIが点検

画像で判定、見過ごし防止

撮影のため大阪城の「六番櫓(やぐら)」上空を飛行する小型無人機 =2017年6月

文化庁は、城や寺院、古民家といった木造建築物の劣化を人工知能(AI)が点検するシステムの試験運用を来年度にも始める。自治体職員らが撮影した画像を基に劣化の程度をAIが判定する。人手不足などで点検が行き届かずに破損したまま見過ごされるのを防ぎ、効率的な維持管理につなげる狙い。

自治体職員らがデジタルカメラや小型無人機ドローンで撮影した画像をシステムに送信。特に傷みやすいかやぶき屋根や柱の状況を中心にAIがチェックし、鳥獣被害や雨などによる劣化の程度を示す。AIに加え、専門家が画像を見て助言する仕組みも検討する。

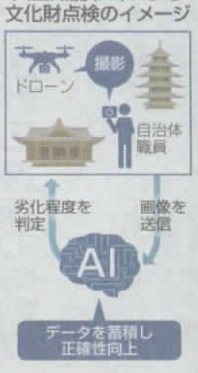
システム開発には既に着手しており、現在は破損箇所の画像から劣化の傾向などをAIに学習させている。

文化庁によると、国宝や重要文化財の修理が必要かどうか判断できる技術者は全国に100人程度。高齢化や後継者不足に悩まされている上、自治体の文化財担当職員も減少傾向にある。

今後は劣化状況の把握だけでなく、修復が必要な箇所をAIが特定することもできるようにしたい考え。データを蓄積することで、あと何年程度で修理が必要となるかをAIが判定できるようにもなるという。画像に加えて、瓦をたたく音の響きを記録してAIが状態を確認できるかどうかも検討を進める。

文化庁担当者は「壊れてから直すのではなく、計画的な予防措置を取って修理費の抑制にもつなげたい」と話した。

人工知能(AI)による文化財点検のイメージ



川

自銀南公民館

野火疾る大地
とく
秋刀魚焼く残
肋
焼きむすび
母あふれ
炭火焼の匂い
さんま
人を焼く煙は
のか
焼き餅を焼か
せよ
水たまり飛ん
なる
簪居半年 な
ないのに
おねがいね
ペンと紙
《折り句 む
ムッとくる手
ごと
むらさきの手
だす

コロナ禍に水
ざりき鈴の緒
し
亡き人の声が
の荒野を彷徨
帆立貝炭火に
じめ潮の香匂
イー
猛暑の日々向
げれば皆笑う
く
梅雨明けの
の声宵に聞こ
ぎる
草引く手思わ
小さきむらさ
て咲く
返事待つ日々
だく今宵は友
う
東京に勤めた
に朝顔からみ
す